

日本語断片文の統語構造

新 田 義 彦

要旨

主部と補部，あるいは主体と対象を持つ述語，のように完結した形式を持たぬ文を，断片文と呼ぶことにする。日本語文においては断片文が実際の言語運用の場で多用されている。会話文，スローガン，キャッチフレーズ，宣伝文，勧誘文，通知文，など枚挙に暇がない。芸術的意図をもって使用される断片文が，俳句のごとき詩文である。

本論文では俳句を典型例とする詩文の統語構造を，N（名詞あるいは体言），V（動詞あるいは用言），F（助詞，機能語，切れ字）などの，簡単な統語記号だけを用いてパターン抽出する。意味構造の抽出は，著者が提案している核文とメタ文に依拠する函数型文法を用いて行う。

俳句や詩文のごとき断片文が，どのような統語構造を持つのか，そしてそれが文の意味構造とどのように関わるのか考察することが本論文の目的である。

断片文は必然的に語句の「省略」をふんだんに行う。この省略ゆえに俳句や詩文の構成と解釈が難しく感じられることもあるが，多くの場合，含意，示唆，連想などの解釈（いわゆる味わい）を深化する。印象的なキャッチフレーズの場合には，省略による簡潔表現が理解や印象を強化する。

断片文の構成と解釈の形式化や半自動化に接近したいという隠れた動機も，本研究には潜在する。

1 はじめに

動詞とそれが支配する名詞，そして適正な修飾語などが整備された日本語文，つまり文法形式が完結している日本語文は，ある種の調和の美を持つ。

一方，俳句は文法的な完成形式を必ずしも充足しないが，調和の美を持つことは疑いようもない。俳句の芸術的感興の源泉は，極限まで簡素化された語句の配置にあると言われる。簡素化は，語句の切捨てを極限まで行うことにより達成される。その結果，到達する文は，しばしば断片文（fragmental sentence）とならざるを得ないが，形式的に充足した文よりもはるかに強い美質と訴求力を持つことが広く認められている。

“語句の切捨て”は，しばしば“省略”と呼ばれ，俳句の本質あるいは美質の淵源として論じられることが多い〔cf. たとえば雑誌“角川俳句 2012年12月号「省略」の極意”〕。しかし筆者は“省略”という呼び方は適当ではなく，“不言”と言うべきと思う。意図的な沈黙や示唆（暗示）というニュアンスを強調するためである。この議論は別の論文で論じることにし，ここでは取り上げない。

早速，人口に膾炙している著名句や警句，宣伝文を例に，統語構造（記号パターン）と意味構造（核

文とメタ文) を見てみよう.

(1) 古池や蛙飛び込む水の音

N1 や N2 V N3 の N4

K1 = N1が存在する, N1に筆者がいる

K2 = N2がVする

K3 = N3のN4が発生する

メタ文M (K1, K2, K3) の構造は:

K1という場所で, K2という事象が発生し, その結果K3が生起した.

(2) 柿食えば鐘がなるなり法隆寺

N1 V1 ば N2 が V2 なり N3

K1 = φがN1をVする

K2 = N2がV2するようだ

K3 = N3 という場所で事象は起きた

メタ文M (K1, K2, K3) の構造は:

K1しているとき K2が発生した K3という場所であるいは

K1が原因となって K2が発生した 場所は K3

(3) マッチ1本火事のもと, 美味しいお汁は味の素

N1 N2 N3 の N4, Adj N5 は N6 の N7

K1 = N1 N2 が N4 である

K2 = Adj N5 が N6 の N7 による

メタ文M (K1, K2) の構造は:

K1とK2は, 語呂 (語句の並びの外形) が似ている

(4) カステラ1番, 電話は2番, 3時のおやつは文明堂♪

N1 N2, N3はN4, N5のN6はN7

K1 = N1はN2である

K2 = N3はN4である

K3 = N5のN6はN7がよい

メタ文M (K1, K2, K3) の構造は:

K1, K2, K3は, 語呂が類似で接続がリズムカルである. 1, 2, 3という数字の連鎖も音調がよい. この勢いに載せて, K3を宣伝 (推薦) する.

(5) 注意一秒, 怪我一生

N1 N2, N3, N4

K1 = N1はN2 [という時間的代償] を要する

K 2 = N 3 は N 4 [という時間的代償] を要する

メタ文 M (K 1, K 2) の構造は：

K 1 は K 2 を回避する手段となり得る． K 1 と K 2 のコストの差の大きさに留意して K 1 を怠るなかれ．

上記はわずかな例題であるが，統語論的には語句の省略，特に V（動詞，動詞句，用言）の省略（不言）が顕著であることが分かる．意味論的には，因果関係（そのように言う理由，背景）の省略（不言）が顕著であることが看取できる．

上記の断片文においては，核文 K 1 と K 2 を配置するだけであり，相互の関係には言及せず読み手の判断・推量・連想を強く期待（奨励）するという形式を取っていることが分かる．

若干の助詞や機能語を付加しながら N（名詞，名詞句，体言）を配列するだけの統語パターンにより，訴求力のあるメッセージを含意するには，N の語彙選択に相当の工夫が必要である．上記のような簡素な統語パターン分析では，当然のことながら語彙選択のメカニズムや先導原理を探る手掛かりは得られない．俳句，詩文，キャッチコピーを作成（推敲）する努力の大半は N の語彙選択の工夫にある．おびただし数の俳句入門書や解説書が出版されているが，その叙述の過半は語彙選択の勘所や要諦の解説に費やされている．本論文では語彙選択の工夫については探究しない．もっぱら統語パターンの分析に特化し，そこから何が抽出されるか見極めることとする．

2 断片文の持つ統語パターン

俳句を典型例とする断片文を，相当数取り上げ，その統語パターンを分析する．メタ文と核文による意味パターンについても併記する．メタ文による意味パターン記述は，いわばマクロな意味パターンである．断片文の中に埋め込まれている単純な文，核文の相互関係の記述である．俳句コーパスとしては，古典句は，大野林火の歳時記〔俳句文学館〔編〕ハンディ版入門歳時記，角川書店（1984-4-20）〕，および水原秋櫻子の歳時記〔新装版 俳句小歳時記，大泉書店（2005-1-17）〕から，現代俳句は月刊雑誌「角川俳句」〔2012-12号～2013-5号〕から採集した．

（6）寒鯉を見て雲水の去りゆけり 森 澄雄

N 1 を V 1 して N 2 の V 2

K 1 = 行脚僧が寒鯉を見る

K 2 = 行脚僧が去っていく

メタ文 M の構造は：

M = K 1 そして（その後で） K 2，

あるいは

K 1 が原因・理由（＝行脚僧は何かを悟り）で K 2

省略：K 2 の理由，この句の作者の感懐，全体の状況．寒鯉の寂寞（まく）と雲水の孤影を髣髴させる〔大野林火 入門歳時記 角川（1984）〕

（7）此（この）秋は何で年よる雲に鳥 松尾芭蕉

N 1は WAd V N 2にN 3

K 1 = この秋年をとった

K 2 = 何故だろう

K 3 = 雲に鳥がいる

WAd は 疑問副詞

省略 = 理由, (特段に理由の解明を求めているではない)

状況 = 全体的に寂寥感がある, など

メタ文Mの構造は:

M (K 1, K 2, K 3) = K 1, しかしK 2 (理由は不可知), K 3という状況である. K 3がK 1の理由かもしれない. あるいは単に, K 1の状態に随伴する情景かもしれない.

(8) 行く我にとどまる汝 (なれ) に秋二つ 正岡子規

V 1 N 1にV 2 N 2にN 3 N 4

K 1 = 我は行く (旅立つ)

K 2 = 汝は留まる

K 3 = それぞれに秋がある

メタ文Mの構造:

M () = K 1かつK 2, そして状況は両者ともにK 3, しかしK 3の細かい状況は異なる

・省略: 状況と理由, 我の秋と 汝の秋と, 2つ別々であるが, どう違うのかなぜ違うのか?

(秋という季節の中に二人の異なる状況や感懐が込められている. 表層的には秋が2つあるのだが, 実は秋を感じる二人 (我と汝) の状況が異なるだけなのだ)

(9) なにがなしたのしきこころ九月来ぬ 日野草城

Adv Adj N 1 N 2 V 1した

K 1 = 何となく楽しい気分である

K 2 = 九月が来た

M = K 1であるが, これはK 2ゆえである

省略 (不言): なぜ (主体, 主人公) が楽しい気分であるのか. 表面的には秋 (= 九月) が来たからと言っているが.

(10) 死ぬときは箸を置くやうに草の花 小川軽舟

V 1 N 1 は N 2 を V 3 N 3 に N 4 の N 5

省略 (不言): このようなことを言う真意.

“箸を置くように”とはどういうことか? そしてそれは“草の花”とどう関わるのか? すべて不言, 謎である.

謎解き: 草の花のように無名の人として生涯を終えてもよい. 食事を終えて箸を置くようにさりげなく死ねたらよい. 淡々とした諦観というべきか.

(11) 秋立つや川瀬にまじる風の音 飯田蛇笏

N 1 V 1 や N 2 に V 2 する N 3 の N 4

K 1 = 秋が来たのだろうか？

K 2 = 川瀬（川の浅いところ）に風が吹く音がする

M = K 1 を深く感得するが、それは K 2 という現象を観察（経験）したからだ。

K 2 が理由・原因で、K 1 を実感する。

Cf. 秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行。（古今和歌集）

Cf. 利根川の川瀬も知らず直（ただ）渡り

万葉集

(12) 鯖うまくなりて九月や雨ばかり

草間時彦

N 1 が V 1 して N 2 や N 3 ばかり

K 1 = 鯖うまくなった

K 2 = 九月になった

K 3 = 雨ばかり降る

M = K 2 の時、K 1 そして K 3 という事象が起きている

省略：心情、感懐、などすべて不言。鯖がうまくなって 雨天が続く秋になったが、それがどうした
というのか。何を思うのか。すべて不言。しかし言う必要はない。鯖の美味+秋の長雨、これで読者は
様々な思いを惹起される。

(13) 牛部屋に蚊の声闇（くら）き残暑かな

松尾芭蕉

N 1 に N 2 の N 3 が Adj N 4 かな

K 1 = 暗い牛部屋に蚊の音がする

K 2 = 残暑である

省略：全体状況、場所、時期、は描写されているが、観察者の感懐は不言。

（読者はどのような状況を想起するだろうか？）

蚊の音が暗いと言っているが、実際に暗いのは牛部屋である。もちろん蚊の音が暗く低いと解釈して
もよい。情景から心情を惹起させる典型的な俳句である。

(14) 秋暑し古書荒縄に縛（ばく）さるる

木下夕爾

N 1 が Adj N 2 が N 3 に V 1 されている

K 1 = 残暑である

K 2 = 古書が荒縄で縛られている

M = K 2 であるのは、K 1 が原因 / 理由ではない。逆にまた K 1 が原因・理由で K 2 が起きて
いるわけでもない。しかし、K 1 という状況と K 2 という状況は、よく釣り合う。

省略：全体状況は述べられているが、作者の心情・感懐は不言。句の表層的意味は直裁に理解できる
が、著者が本当は何を言いたいのかは不明。しかしこの状況と心情の均衡はよく理解できる。

(15) 密会の窓より高し梅雨の駅

眞鍋呉夫

N 1 の N 2 より Adj N 3 の N 4

K 1 = 私は X 女と密会している

K 2 = (宿泊しているホテルの) 窓から見上げると駅があるのが分かる

K 3 = 梅雨時である

M = K 1 そして K 2 に気づいた、時は K 3

省略 (不言) : なぜ駅の高さが気になるのか? 全体的心情や状況も不言.

明るく開放的な恋とは正反対の、暗く背徳的な恋が詠まれていると言うべきか.

(16) 木曾谷の奈落に見たる銀河かな 松本たかし

N 1 の N 2 に V 1 した N 2 かな

K 1 = [私は] 木曾の谷底 (= 奈落) に銀河を見た

省略: 描写は直裁で省略や不言の部分はない. 全体的状況からは、比較的容易に作者の心情が推察できる. 素朴な句作というべきだが、読者の心に直接切り込む新鮮な感懐がある. 暗い奈落 (地獄) の底のような木曾の谷底から、神秘的にまで美しい銀河 (= 天の川) が見えた. 言いようのない救済の感懐を覚える、・・・と解釈するのは素朴過ぎるか?

(17) 鰯雲人に告ぐべきことならず 加藤楸邨

N 1 N 2 に V 1 する N 3 ではない

K 1 = 鰯雲が見える

K 2 = 人に話すようなことではない

鰯雲 (巻積雲) が空の高みに見える. これは鰯の大量の兆しであるが、そんなことを人に触れ回る必要はない. ただ初秋の青空と白いうろこ雲の美を堪能していればよいのだ. (註: これは筆者の解釈. 多分に誤解の可能性もある)

不言: 著者が K 2 のように言う理由や魂胆.

(18) 天の川露台にのこる椅子二つ 竹久夢二

N 1 N 2 に V N 3 Adj

K 1 = 夜空に天の川がかかっている

K 2 = 露台 (バルコニー) には椅子が 2 つだけ取り残されている

M = K 1, このとき K 2 K 1 と K 2 は並列状況.

省略 (不言) : 全体的状況. 天の川や残された二つの椅子が、なぜ作者の心を惹きつけたのか、その理由も不言. 不言のゆえにこの句は美しい.

答え: 最愛の女性笠井彦乃は 23 歳で死去 (結核). 夢二 35 歳のときであった. 美しい銀河を椅子に座って二人で見た思い出. 今はただ銀河と椅子が残っているだけ.

示唆あるいは含意 (“椅子 2 つが残る”) = 二人揃って座ることはない. 死別した.

(19) 庭石にぬれてちる灯や星まつり 竹久夢二 (第二句集より)

N 1 に V 1 して V 2 する N 2 や N 3

K 1 = [客を迎える打ち水に料亭の] 庭石が濡れている.

K 2 = 濡れた庭石に [料亭の] 灯火が星を散らしたように光っている.

K 3 = [今宵は] 星祭 (= 七夕) である.

省略：状況. このようなセンチメンタルな述懐をする理由.

答え：今は亡き彦乃に逢いたい. 天の川の兩岸の牽牛星と織女星の逢瀬のように.

(20) 吹（ふき）とばす石はあさまの野分（のわき）哉（かな） 松尾芭蕉

V 1 する N 1 は N 2 の N 3 かな

構造と解釈は自明と言えるほどに単純. そのゆえに台風が激しく石を吹き飛ばす様が活写されている

K 1 = 石が吹き飛ばされている

K 2 = 浅間山を台風が襲ってきた

M = K 2 が原因で K 1. あるいは K 1 のとき K 1.

・省略：作者の感懐. しかしこれは自明. 自然現象に対する素直な畏敬の念というべきか.

(21) 風の日や風吹きすさぶ秋刀魚の値 石田破郷

N 1 の N 2 や N 3 V 1 する N 4 の N 5

K 1 = 風が強く吹く日である

K 2 = 秋刀魚の値段が高い

終戦直後昭和 20 年の秋の東京へ所用で疎開先の埼玉から出てきた. 秋刀魚の季節であるが高くて手が出ない.

M = K 1 のとき K 2 である

不言：K 1 と K 2 の関係. しかしなんとなく（雰囲気的に）K 1（風が強く吹く）と K 2（秋刀魚の値がはる）の両立が納得できる.

Cf. 石田破郷の秋刀魚の句：

隣人の顛顛（こめかみ）憂しや秋刀魚食ふ

註：あき子の解説「昭和十四年作で当時作者は目黒駒場会館の住人で独身時代だから、一高前の駅周辺か、神田の学生街の外食券食堂ではないだろうか。（中略）中年のややうらぶれた男が街の食堂の片隅で丹念に焦げた秋刀魚を噛みしめている図が想像されてならない。若い作者はそれを憂しと見たのだが、実は己が姿に更に味けないものを感じていたのであろう」

波郷 26 歳の秋の句. 3 年後に、吉田安嬉子（註：本名せん. のちに俳号をあき子とする.）と結婚し、十月や顛顛さやに秋刀魚食ふ

の句を詠む.

波郷自身が自解を施している：

「旧作の『隣人の顛顛憂しや秋刀魚食ふ』の思はせぶりが無く、爽快の季節の味が出てみると思ふ. 前年の

『松籟（しょうらい）や秋刀魚の秋も了（おわ）りけり』

も別趣の味を有する」

註：松籟（しょうらい）＝松に吹く風. また、その音. 松風.（広辞苑 第 5 版より）

（上記 石田破郷の句の解説は、“風鶴山房：今月の 破郷句 2004 年 9 月

<http://www.ne.jp/asahi/i/hakyo/ikku/2004/0409.html>” を引用しつつまとめた.）

(22) 狐火や髑髏に雨のたまる夜に 与謝蕪村

N 1 や N 2 に N 3 の V 1 N 4 に

K 1 = 狐火が見える (存在する)

K 2 = [時は] 髑髏に雨のたまる夜

M = K 2 のとき K 1 が起きた.

(23) 公達 (きんだち) に狐化けたり宵の春 与謝蕪村

N 1 に N 2 V 1 たり N 3 の N 4

K 1 = 狐が公達に化けた

K 2 = [時は] 春の宵

M = K 2 のとき K 1 が起きた.

上記 (22) と意味的に同型であることに注意すべきである.

(24) 巫女 (かんなぎ) に狐恋する夜寒かな 与謝蕪村

N 1 に N 2 V する N 3 かな

K 1 = 狐が巫女に恋する

K 2 = [時は] 夜寒の頃

M = K 2 のとき K 1 が起きた.

上記 (22) (23) と意味的に同型であることに注意すべきである.

ここで少しだけ、統語構造における補文構造について検討する.

補文は:

S 1 = 髑髏に雨のたまる

S 2 = 狐化けたり

S 3 = 狐恋する

付加部は

Adjunct 1 = 夜に

Adjunct 2 = 宵の春

Adjunct 3 = 夜寒

補文を経由あるいは介在させた省略は、主要部 (主辞) をバサリと切り捨てることである。補文+付加文だけから、主要部つまり主要な陳述動詞 (動作) を、読者の想像や推理に委ねる。このような思い切った省略 (不言) により、詩的感興と重厚な含意の生起を狙うのである。

ここで、函数文法による文の意味の考え方は、次式で表すことができる。

$H = M (K 1, K 2, K 3)$

H: 表層文, たとえば俳句の断片文

M: メタ文

K_i: 核文

Mは、文の構成を担うパターンのようなものである。文意のマクロな記述の役割も担う。通常の文法論と違って、核文 K_i の意味については議論を保留（棚上げ）しておく。

核文はほぼ無数にある。核文においては複数の単語の組み合わせが許容される。単語よりもさらにバリエーションがあるので、核文のバリエーションは感覚的には無限である。

本論文では、核文の個々の意味は分析せず、自明のものとして扱うのであるが、将来的には粗い意味分類が必要であろう。核文の意味分類は今後の課題としたい。

3 パターン間の準同型

断片文の統語パターンおよび意味パターン間の同型性について考察する。“準”をつける理由は、同型つまり同一パターンよりも少し緩めてパターンの類似性を把握するからである。統語パターンは、N, V, Fなどの統語標識の並びにより記述する。意味パターンは、メタ文M () による核文 K_1, K_2, K_3, \dots の関係付けにより記述する。言うまでもない補足であるが、“準同型”の意味は、数学、特に代数学における準同型 (homomorphism) の概念とは無縁無関係である。

3.1 補文構造としてみた断片文のパターン

ここで少しだけ、補文 (complement) の概念を援用して統語パターンの立体的な構造を検討してみよう。橋本進吉の文法論 [Hashimoto 1934, 1944] に基づく伝統的学校文法論による、日本語文の文節構造を見てみよう。

(1) 私は 本を 読みたい。

という文は、下記のような文節構造を持つ単文とされる。

文 ← 文節1 + 文節2 + 文節3

文節1 ← 私は

文節2 ← 本を

文節3 ← 読みたい

さらに 橋本文法論では、文節の平面的な配置関係分析を深化させ、連用従属関係、連体従属関係、対等並列関係など、文節相互の意味的關係にも論及した。これらの関係は日本語文における「入れ子構造」としても定式化されている。

日本語の基本構成要素を、「文節」つまり「内容語」+「機能語」として捉えるやり方は、今なお健在であり、情報処理、特に自然言語処理の種々の応用プログラムで採用されている。「機能語」とは、助詞、格助詞、副助詞、助動詞、などの概念が複合・融合したものであり、英語文における構文的位置づけ、助動詞の付与、前置詞（あるいは前置詞相当語句）の付与、などと比較的よく対応することが知られている（たとえば [Nitta 2012 a b] などにも論述がある）。

文の立体構造への研究的関心が強化されたのは、N. Chomsky の生成文法論に触発されて、英語文における

S → NP + VP

に対応する日本語の文生成規則を構築する努力（たとえば、奥津敬一郎の「生成日本文法論」[Okutsu 1974]）が開始されてからのように思われる。

本章では生成文法論、句構造論の枠組み、そして最近の GPSG（一般化句構造文法理論）や HPSG（主辞駆動型句構想文法理論）（たとえば [Gunji 1997]）の枠組みによる、語句の移動や素性の伝播（特に投射）などの概念手法は採用せず、素朴に後述のような定式化により、日本文の構文構造（syntax）を定式化する。このような単純素朴な形式化を採用する理由は、日本語文の意味の抽出に力点を置き、省略現象を直観的な語用論として扱うためである。

ところで「省略」を、構文要素の欠落として分析する際には、「補文構造（compliment structure）」という概念が有効である。

変形生成文法論における強力な理論装置である、補文構造、補文標識（that, wh 詞, to 不定詞, ing, ～こと, ～という）、付加（adjunct）、移動と痕跡、下位範疇化の原理、などを、今回は援用して、俳句のような断片文における「省略」をもつ統語パターンを扱いたい。

[Okutsu 1974] のベースルールに準じて、下記のような古典的書き換え規則（production）の記法をゆるやかに使うことにする。古典的書き換え規則は素朴な言語直観とよく馴染む。

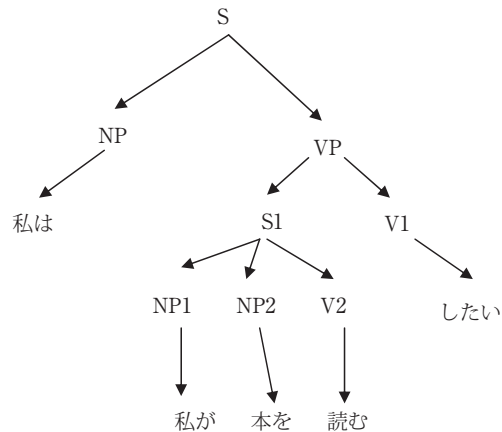
H → N + F + VP + NP
 F → “Φ”, “や”, “の”, “かな”, “に”, “も”, “は”, ……
 VP → N + V
 VP → N + “の” + V
 VP → N + “は” + V
 VP → N + “も” + V

…

S = 私は 本を 読みたい。

というような日本語文の深層意味構造は、下記のように分析される [Okutsu 1974].

S ← NP + VP
 NP ← 私は
 VP ← S1 + V1
 V1 ← [したい]
 S1 ← NP1 + NP2 + V2
 NP1 ← 私が
 NP2 ← 本を
 V2 ← 読む



上記の木構造による表現を，平板な線状のブラケット記号で表現すると下記ようになる。

S = 私は (私が 本を 読む) したい

S = NP + VP

VP = S1 + Comp + V1

NP = 私は

S1 = 私が 本を 読む

V1 = ~したい

Comp = ϕ

Comp は 補文標識 (complementizer) であり，上記の文では空記号 (ϕ) である。

S1 は補文 (complement) である。上記の文では，「埋め込み文」の形式をしており，私の欲求 (~したい) の具体的内容を表現している。

ここで注意すべきは，補文が，文Sの主要部 (註：これを主辞という) と同位の地位を占めている点である。

今日は (私が 本を 読む)

日曜日は ([私が] 本を 読む)

この部屋は (私が 本を 読む) [ところ] である

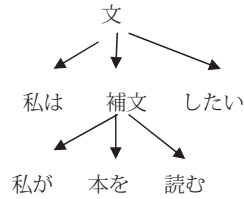
私は + (彼が 本を 読む) + たい → 私は 彼に 本を 読ませ たい

上記の例文では丸カッコ“(”と“)”で囲まれた文が，補文となる。このような構造分析を勘案すると，“私は”という提題部を文法カテゴリの主部 (主辞) として立てておき，それと同位の補文 (complement) を配置して文全体を分析するやり方が有利なように思われる。

このような「埋め込み文 (補文) 構造」を考え，「たい」つまり「~したい」を，動詞「読む」に密着した欲求・願望の助動詞と見ず，主文の述語 (predicate) としてみることで，そして主文の述語の項 (述語が支配する文法要素) として補文をみる，というやり方には大きな利点がある。補文構造を書き下す

と下記のようなになる.

文 ← 私は+補文+したい
補文 ← 私が+本を+読む

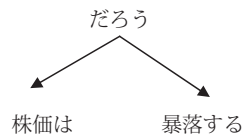


主語が省略されている次の文を取り上げてみよう.

(2) 株価は 暴落する だろう.

という文は

(3) だろう (株価は+暴落する)



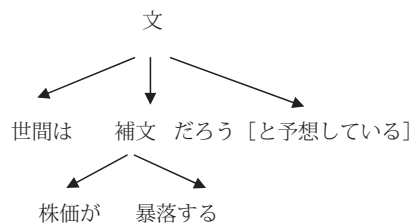
のように分析される. この分析は下記のような省略補完を素直に導出でき, かつ前記の(1)の文法分析と自然に整合する. つまり省略された主語を補完した文

(4) 財界は 株価が 暴落する だろうと予想している.

が素直に導出できる. この導出された文の分析は下記のように書ける.

(5) 文 ← 私は/世間は/新聞は/財界は+ (補文) + だろう [と予想している/と思っている].

補文 ← 株価が+暴落する



これまでの論述では, 副助詞「は」と格助詞「が」の区別には意図的に無関心であったことを断っておく. どちらの助詞も主語を担ぐ機能語として扱った.

「は」と「が」以外の助詞, たとえば「に」, 「の」, 「で」, なども主語 (Subject) あるいは主格 (Agent)

を担ぐ能力を持つことがある（たとえば [Tokunaga 2010-7] を参照せよ）。

補文構造を導入したことは、文の構文構造の分析に、意味構造を少しだけ持ち込んだことになる。文の主語あるいは動作主が、判断・予想・言及などの知的動作をしたことを、構造的に分析したことになるからである。このような意味が関与する構造分析は、文を単なる文節の集合とみる分析ではできないことであった。しかしながら、

日本語文 ← { 文節〔達〕 }

という単純明快な構文定義にも多くの利点がある。このことは後ほど言及する。

中括弧 { a } による記号式は、要素 a からなる集合という意味である。 a は1個以上複数個存在してよい。Bag of a (a の入った袋) と俗称されることもある。

“複数個の文節” からなる文に、様々な制約規則を課することにより、実際の日本語文を定義（あるいは規定・導出）するというやり方にも多くの利点があると筆者は考える。このやり方は後続の章で取り上げるが、簡単に要点を述べておく。

日本語文 ← { 文節〔達〕 } ただし 制約条件を満たす

上記は、単純な日本語構文定義法の定式化であるが、本研究では“文節”の代わりに“核文”を、“制約”の代わりに“メタ文”という概念を使う。核文は、文節における内容語の部分、あるいは単文（単純な命題文）である。メタ文は、助詞の配置や文の配置（つまり補文構造や付加文構造）を統括する規則をメタ記号により規定するものである。

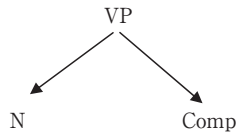
補文は必ずしも“文”の形式をもつ必要はなく、一般の句であってもよい。このことを強調するために“補部”と呼ばれることもある。

また何を補文と定義するかについても統一見解や標準は存在しない。元来、英語文において、wh 詞や that に先導される文、(疑問文の中の埋め込み文や判断の内容を表す文)、to 不定詞に後続する文、使役動詞や感覚動詞の対象となる文などが、補文として考察されてきた。日本語の文には、英語の主部（主辞）や動詞句（VP）に、ピタリと対応する文構成要素が存在しないため、英語と同様なやり方で補文は定義できない。また英語文であっても、補文の定義には様々なバリエーションがある。

最後に本論文で採用する補文の概念定義を示す。

- 1) 文の意味的完成を実現するために必須の、文構成要素である。
- 2) 文の成立必須要素である主部（主辞）と同位の地位を占める。
- 3) 明示的であるにせよ黙示的であるにせよ、特定の標識（マーカー）に先導される文あるいは句である。このマーカーは補文標識（complementizer）と呼ばれる。

英文においては



という構造を持つことが多い。つまり主辞Nに随伴し、補文標識Compに先導される。

Xバー理論により、投射あるいは最大投射(XP)という概念を使って補文を定義すると下記のようなになる。

- 1) 句は必ず1つの主要部(head)を持つ。
- 2) 句は、主要部Xの性質を継承したXの投射(projection)である。
- 3) 補部は主要部Xの同位要素(sister)、付加部(adjunct)はXバーの同位要素として出現する。

この定義により補文(complement)と付加(adjunct)の違いが、投射レベルの違いとして明示的に示される。付加は通常、時間・場所・状況・程度などを表す連用修飾句(たとえば副詞句)として出現することが多い。

3.2 準同型の関係

Niの配置とVの配置が、同型であるときパターン間に準同型の関係があると見なすことにする。Niの個数は無視する。Vが複数個ある場合、つまりVi(i=1, 2, 3, ..., n)となっている場合は、Vの個数nが等しい場合のみ、準同型の関係があると定義する。

以上は統語パターンにおける準同型であるが、メタ文つまり意味パターンにおける準同型は、核文Kの個数とそれらの間の関係が、等しい場合に準同型と定義する。

たとえば前章の

(11) 秋立つや川瀬にまじる風の音 飯田蛇笏

N1 V1 や N2にV2する N3のN4

において、N1V1をNPに置換すると、パターンは

NPや N2にV2する N3のN4

となる、このパターンに合致する典型句は、言うまでもなく、

(1) 古池や蛙飛び込む水の音

である。つまり芭蕉のこの句は、(11)の蛇笏の句と統語的に準同型である。

(11)の蛇笏の句の意味パターンは：

K1 = 秋が来たのだろうか？

K2 = 川瀬(川の浅いところ)に風が吹く音がする

M = K1を深く感得するが、それはK2という現象を観察(経験)したからだ。

K2が理由・原因で、K1を実感する。

芭蕉の句(1)の意味パターンは：

K1 = 古池があるなあ

K 2 = 蛙が飛び込む音がする

M = K 1 を深く感得するが、それはK 2 という現象を観察（経験）したからだ。

蛇笏の句における「や」は、用言（動詞）の終止形に付加して、疑問（問いかけ）のニュアンスを持ち、芭蕉の句における「や」は体言（名詞）に付加して、純粹の切れ字（詠嘆）である、というわずかな相違があるが、両者を意味的に準同型とみなしてよいであろう。

もう1つ例を示す。一見、意味的にも統語的にもかけ離れているように感じられるが、ほんの少し汎化すると準同型性が浮かび上がる興味深い例である。

前章の（15）の眞鍋呉夫の句を再度取り上げる。

（15）密会の窓より高し梅雨の駅 眞鍋呉夫

N 1 の N 2 より Adj N 3 の N 4

K 1 = 私はX女と密会している

K 2 = （宿泊しているホテルの）窓から見上げると駅があるのが分かる

K 3 = 梅雨時である

M = K 1 そして K 2 に気づいた、時はK 3

省略（不言）：なぜ駅の高さが気になるのか？ 全体的心情や状況も不言。

明るく開放的な恋とは正反対の、暗く背徳的な恋が詠まれていると言うべきか。

“窓より”を“N 2 より”というように解析せず、次の“高し”つまりAdj（形容詞句）を修飾する副詞（Adv）として解析し直すことにする。

N 1 の Adv Adj N 2 の N 3

また意味パターンも

K 1 = 密会の場（=ホテル）の窓よりも高い

K 2 = 梅雨の駅が

のようになる。

さて、芭蕉の次の句を見てみよう。

（25）父母（ちちはは）のしきりに恋し雉子の声

統語的準同型は自明である。

K 1 = 父と母がしきりに恋しい

K 2 = 鳴き声を出す雉が

意味パターンはいずれも、

M = K 2 がK 1 という状態にある。

つまり（15）と（25）は、意味的にも準同型である。

もう1つ既存の例を出す。

- (23) 公達 (きんだち) に狐化けたり宵の春 与謝蕪村
および
- (24) 巫女 (かんなぎ) に狐恋する夜寒かな 与謝蕪村
- が、統語的にも意味的にも準同型であることは既に述べた。

N 1 に N 2 V 1 たり (する) N 3 [かな]

(23) では

K 1 = 狐が公達に化けた

K 2 = [時は] 春の宵

ただし、“春の宵”を一つの名詞として扱い、N 3として汎化した。

(24) では

K 1 = 狐が巫女に恋した

K 2 = [時は] 夜寒の頃

意味パターンはいずれも、

M = K 2 のとき K 1 が起きた。

であり、明らかに準同型である。

このように短い断片文である俳句においては、容易に多数の準同型グループを見出すことができる。特に統語論的準同型と意味論的準同型が、併行しやすい傾向を持つことが観察された。もちろん、統語的に準同型の関係にあっても意味的には準同型ではないペアも多数存在する。例の記述は省略する。

4 準同型のパターンから導出される完結文

準同型のパターンから完結文を導出するメカニズムについて考察する。ここでいう“完結文”とは、もはや断片文ではなく、動詞句あるいは用言、関係詞、修飾語句などが整備された“形式的に閉じている日本語文”のことである。

メタ文から導出される完結文は、形式的操作により導出されたものであるから、俳句のごとき芸術的詩文の解釈とはならない。ときには何某かの効用を文芸的営為にもたらすかもしれないが、一般には無粋極まらぬ機械的翻訳文のようなものとなる。しかしながら、俳句やキャッチコピーのごとき断片文を、マクロに分類するためには有効である。このことを、以下の思考実験により示す。

統語パターンが準同型である場合は、その外見の意味が類似（つまり準同型）である場合が多いことは既に述べた。したがって、統語的準同型のグループに対する、完結文導出は今回扱わぬことにする。意味的な準同型、つまりメタ文レベルの準同型のグループを対象にして完結文生成を扱うことにする。

M = K 2 のとき K 1 が 発生 (生起) した
というメタ文に対しては、素直に、

「K 1 であるが、そのとき／そのところは K 2 である」という完結文を生成すればよい。この完結

文がもとの俳句の正しい解釈になっているという保障はないが、先にみた例では、うまく適合する。

- | | |
|------------------------------|------|
| (22) H 1 = 狐火や鬮體に雨のたまる夜に | 与謝蕪村 |
| (23) H 2 = 公達（きんだち）に狐化けたり宵の春 | 与謝蕪村 |
| (24) H 3 = 巫女（かんなぎ）に狐恋する夜寒かな | 与謝蕪村 |

補文は

S 1 = 鬮體に雨のたまる

S 2 = 狐化けたり

S 3 = 狐恋する

付加部は

Adjunct 1 = 夜に

Adjunct 2 = 宵の春

Adjunct 3 = 夜寒

完結文は、

(22) + J 1 = 鬮體に雨のたまる夜に狐火が現れた（見た）

(23) + J 2 = 春の宵に狐が公達（きんだち）に化けた

(24) + J 3 = 夜寒の頃狐が巫女（かんなぎ）に恋した

上記の完結文はもとの俳句の構造が単純であったから、比較的簡単に生成ができた。

当然予想されるように解釈の難しい句の場合には、完結文の生成にも工夫が必要となる。

(10) H = 死ぬときは箸を置くやうに草の花

M = K 1 のときは K 2 のようにせよ、そして K 3 を参照せよ（想起せよ）

K 1 = 死ぬ

K 2 = 箸を置く

K 3 = 草の花

完結文：

J = 死ぬときは箸を置くように [さりげなく死ぬべきである]。草の花を見なさい。彼らはさりげなく咲きさり気なく枯死しているではないか。

上記は少し語句の補足をしているので、半自動的な完結文生成ではないが、メタ文の準同型を經由した完結文の生成の有効性を示す証左にはなっている。

上記の俳句と準同型の関係を持つ俳句は、実はすこぶる多い。したがって完結文を半自動生成して、半自動的解釈に資することが期待できる。準同型関係にある俳句の収集と分類、そしてその列記は次の論文に回すことにする。

半自動生成する完結文にもまたある種の美質が要請されるが、この問題も次の論文で取り上げることにはしたい。

5 関連研究

(1) [Kasai 2008] 葛西清蔵, there 構文と俳句

英語文における there 構文は、新情報の提示、一時的状況の提示、こと (nexus の形をとることが多い) の提示をするという性質を持つこと、「一こま」を切り出した描写をする場合が多いこと、などに注目して、俳句の描写・陳述との同型性・類似性を論じている。すべての俳句が、そしてその解釈的翻訳が there 構文により実行できるわけではないが、俳句の形式的意味解釈の1つの戦略として有意義と思われる。本論文では俳句の翻訳、特に英訳の問題には言及していないが、次のステップの研究では改めて、there 構文の翻訳効果について取り上げてみたいと思う。

(2) [Takabane 1952] 高羽四郎, 芭蕉俳句の構文と表意——客語の主体化について

芭蕉の俳句に頻出する「AはBを～する」という客語Bを持つ他動詞構文に注目する。この客語Bが主位に立つ(主体化する)という現象が、俳句の意味解釈の強い足がかりになることを、事例を精密に分析しながら論じている。本質的に断片文である俳句から、述語的構造、つまり Pred (主体、客体) という意味構造を抽出する手法として注目すべき論考であると思う。統語パターンから意味パターンを導出する際の、1つの戦略として次の研究で応用してみたい。

(3) [Takai 2008-1] 高井収, 異文化コミュニケーション教育の試み——高コンテキスト文化としての俳句

異文化圏の人々間のコミュニケーション手段(戦略)として、俳句が有効であることを論じている。この考え方は、筆者が

[Nitta 2012-5a] Y. Nitta, Formal Interpretation of HAiku and Its Application to Communication Interface, Proceedings of. ICSI 2012 (International Conference on Systems and Informatics), Yantai University, China, and IEEE (2012-5-19)

[Nitta 2012-5b] Y. Nitta, Functional Treatment of HAiku and Its Application to Language Education, Proceedings of the 8th International Conference o

などで論じた問題と共通する点が多く興味深い。閉じた世界の人々の間では、ある種の文脈的知識や価値観の共有、前提条件の共有が可能となるので、簡潔かつ極小の文である俳句により、高密度なコミュニケーションが可能であると論じていることは興味深い。高井収氏の研究では、文化交流という視座に重点が置かれているようである。筆者は形式的文法論や函数型文法論に主なる関心があるので、マクロな文化論に領域には触れないことにする。

(4) [Kobayashi 2012-3] 小林可奈子, 俳句学習の可能性

日本語による俳句実作と鑑賞を指導した筆者の授業報告である。初歩から入る学習者がどのように俳句の構造、特に語句の並びを学んでいくのかが、具体的に報告されていて興味深かった。直感的に理解しやすい統語パターンや意味パターンを構成するヒントが得られるかもしれないと思っている。本研究では、俳句学習の問題には触れていないが、筆者が以前に [Nitta 2012-5b] で論じた「言語教育に俳句を使う」方法と関わる場所があるようである。

6 おわりに

俳句は本質的に断片文である。断片文の特徴は、名詞句の連鎖と動詞の省略にある。動作や状況の描写に関わる動詞（用言）が存在しなくても、標準仕様に整形された“閉じた形式の文”と同等あるいはそれ以上の、メッセージ伝達力（訴求力）を持つことは瞠目に値する。もうひとつの看過できない特徴は、断片連鎖の間に厳然と挿入されている、“切れ”つまり意味的境界の存在である。この“切れ”の前後で核文 Ki の切り替えが行われ、俳句を典型とする断片文は強烈な訴求力（メッセージ発信力）を具現することとなる。“切れ”、つまり核文の切り替えををしない文句は、その美質と訴求力が著しく低下することになる。俳句の場合は駄句に墮し、詩文は言霊を喪失することになる。

俳句を典型例とする断片文の統語構造を観察し、そのパターン構造を記号代数的に探る努力をしてみた。意味パターンを抽象化したメタ文という函数構造と関係付けることにより、ある種の準同型関係を持ち込むことができ、断片文のマクロな分類やカテゴリ化の方向を垣間見ることができたようである。

俳句を典型例とする断片的日本語文のカテゴリ化（マクロな分類）を直近の研究課題としたい。

参考文献

- [Gengo 2012-4] 特集「文法の誕生、文法の探求」、月刊 言語、大修館書店、Vol.31, No.4 (2002-4)
- [Gunji 1997] 郡司隆男、自然言語の文法理論、産業図書 (1997-12-15)
- [Hashimoto 1934] 橋本進吉、国語法要説（橋本進吉 著作集、第2冊）岩波書店 (1934)
- [Hashimoto 1944] 橋本進吉、文と文節と連文節（橋本進吉 著作集、第7冊）岩波書店 (1944)
- [Inada1989] 稲田俊明、補文の構造、大修館書店 (1989-2-15)
- [Inahata 2010-6-1] 稲畑汀子 [編]、第三版 ホトトギス新歳時記、三省堂 (2010-6-1)
- [Inoue-K 1976] 井上和子、変形文法と日本語 上、大修館書店、東京 (1876)
- [Inoue-T 2002] 井上 徹、英語における補文省略現象、日本語用論学会 第5回大会 於 関西外国語大学 (2002-12-7) 初出「Missing Complement に関する一考察」
- [Kadokawa 2012-12] 角川俳句——「省略」の極意、角川学芸出版 (2012-12)
- [Kadokawa 2013-1] 角川俳句——新年の季語、角川学芸出版 (2013-1)
- [Kadokawa 2013-2] 角川俳句——俳句は「瞬間」を詠む、角川学芸出版 (2013-2)
- [Kadokawa 2013-3] 角川俳句——春の名句 100 選、角川学芸出版 (2013-3)
- [Kadokawa 2013-4] 角川俳句——俳人 100 名言、角川学芸出版 (2013-5)
- [Kadokawa 2013-5] 角川俳句——新・俳句入門、角川学芸出版 (2013-2)
- [Kasai 2008] 葛西清蔵、there 構文と俳句、札幌大学総合論叢、第25号 (2008-3) pp.133-139
- [Kobayashi 2012-3] 小林可奈子、俳句学習の可能性、大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究、No.10、(2012-03-31) pp.23-37
- [Kokubungaku 2010-7] ぎょうせい国文学—解釈と鑑賞、第73巻7号 (2010-7)
- [Kurasaka 2012] 倉坂鬼一郎、怖い俳句、幻冬舎新書 260、幻冬舎 (2012)
- [Kuwabara & Mastuyama 2001] 桑原和生、松山哲也、補文構造、哲学モノグラフシリーズ 4、研究社 (2001-5-15)
- [Lee 1995] Lee 凧子、日本語の補文構造——Lexicase 文法理論による分析、くろしお出版、東京 (1995)
- [Matsushita 1977] 松下厚、日本語文法の体系、明治書院 (1077)
- [Mizuhara 2005-1-17] 水原秋櫻子 [編]、新装版 俳句小歳時記、大泉書店 (2005-1-17)
- [Mogi 2000-10] 茂木俊伸（としのぶ）、とりたて詞の階層性について、国語学会秋季大会於 安田女子大学 要旨集 (2000-10-28 ~ 29) pp.54-61
- [Nitta 2006] Y. Nitta, Building Carefully Tagged Bi-lingual Corpora to Cope with Linguistic Idiosyncrasy, Proc. LREC' 06, 5th International Conference on Language Resources and Environment, Genova, Italy (2006) pp.840-854
- [Nitta 2007-10] 文意の論理表現 (Representing Sentential Semantics in Logic)、経済集志、Vol.77, No.3 日本大学経済

- 学部 (2007-10) pp.21-52
- [Nitta 2008] Y. Nitta, Applying Machine Translation Technology to Language e-Learning, Proc.11thIASTEAD International Conference on Computers and Advanced Technology in Education (CATE2008) Greek, Crete Island (2008) pp.201-207
- [Nitta 2008-3] 新田義彦, 言語産業を支える基礎技術の展望 (A View of Basic Technologies for Language Industry), 産業経営研究 第30号 (2008-3) pp.57-69
- [Nitta 2011-1] 新田義彦, 不完全な機械翻訳の利用法と課題 (The Utility and Problem of Insufficient Machine Translation), 経済集志, Vol.80, No.4 日本大学経済学部 (2011-1) pp.1-54
- [Nitta 2011] サイバースペースにおける自我と新産業 (On Self-consciousness and New Business in Cyber-space), 産業経営研究 No.33 (2011)
- [Nitta 2011-10] 新田義彦, 函数型文法による詩文の解釈 (An Interpretation of Poetic Sentences by Functional Grammar), 経済集志, Vol.81, No.3 日本大学経済学部 (2011-10) pp.1-13
- [Nitta 2011-4] 新田義彦, 対訳アラインメントの効用の検討 (A Study on the Utility of Bilingual Alignment), 経済集志, Vol.81, No.1, 日本大学経済学部 (2011-4) pp.1-38
- [Nitta 2012-3-20] 新田義彦, 俳句の意味の形式的解釈の試み (An Essay on a Formal Interpretation of HAIKU), A-13-5 思考と言語セッション, 電子情報通信学会 2012 総合大会 (岡山大学) 講演論文集 (2012-3-20)
- [Nitta 2012-3-31] 新田義彦, 機械翻訳の原理と活用法——古典的機械翻訳再評価の試み, 明石書店 (2012-3-31)
- [Nitta 2012-7] Y. Nitta, Fragmental Syntax of Haiku and Its Effect in Elementary Language Education, 経済集志, Vol.82, No.2 日本大学経済学部 (2012-7) pp.21-32
- [Nitta 2012-10] Y. Nitta, Aesthetic Sentence Generation by Functional Grammar, 経済集志, Vol.82, No.3 日本大学経済学部 (2012-10) pp.9-17
- [Nitta 2012-3] 新田義彦, 日本型言語産業としての詩文作成支援システムの検討 (A Study on a Poetic Sentence Composition Support System as a Typical Product of Japanese Language Industry), 産業経営研究, 第34号, 日本大学経済学部 (2012-3) pp.1-19
- [Nitta 2012-1] 新田義彦, 函数型文法による単文の変形 (Transformation of Simple Sentence using a Functional Grammar), 経済集志, Vol.81, No.4, 日本大学経済学部 (2012-1) pp.1-29
- [Nitta 2012-3-1a] Y. Nitta, Foreign Language Education Using Classical Transfer-Base Machine Translation Technique, Recent Advances in Computer Science and Information Engineering Vol.3, Springer Verlag (2012-3-1) pp.443-450
- [Nitta 2012-3-1b] Y. Nitta, Functional Treatment of Bilingual Alignment and Its Application to Semantic Processing, Advances in Intelligent and Soft Computing 144, Proceedings of the 2011 2nd International Congress on Computer Applications and Computational Science, 2011 Bali, Indonesia (2011-11-16), Springer Verlag (2012-3-1) pp.223-229
- [Nitta 2012-5a] Y. Nitta, Formal Interpretation of HAIKU and Its Application to Communication Interface, Proceedings of ICSI 2012 (International Conference on Systems and Informatics), Yantai University, China, and IEEE (2012-5-19)
- [Nitta 2012-5b] Y. Nitta, Functional Treatment of HAIKU and Its Application to Language Education, Proceedings of the 8th International Conference on Fuzzy Systems and Knowledge Discovery (FSKD 2012) Chongqing, China (2012-5-29)
- [Nitta 2012-7] Y. Nitta, Fragmental Syntax of HAIKU and Its Effect in Elementary Language Education, 経済集志, Vol.82, No.2, 日本大学経済学部 (2012-7) pp.21-32
- [Nitta 2012-8] Y. Nitta, Aesthetic Sentence Generation by Functional Grammar, 経済集志, Vol.82, No.3, 日本大学経済学部 (2012-8) pp.9-17
- [Nitta 2012-8] Y. Nitta, An Approach to Linguistic Aesthetics by Functional Grammar, Proceedings of 22nd Biennial Congress of The International Association of Empirical AESTHETICS, Taipei (IAEA2012), (2012-8-22 ~ 25)
- [Nitta 2013-4] Y. Nitta, 俳句における補文構造とその省略の種々相 (Complement Structure in HAIKU and Its Variety of Ellipsis Types), 経済集志, Vol.83, No.1, 日本大学経済学部 (2013-4) pp.1-16
- [Okutsu 1974] 奥津敬一郎, 生成日本文法論, 大修館書店 (1974)
- [Oono 1984-4-20] 大野林火 [監修], 俳句文学館 [編] ハンディ版入門歳時記, 角川書店 (1984-4-20)
- [Saraki & Nitta 2007] 佐良木 昌, 新田義彦, シテ形用言連接句の対訳データ構築と日英機械翻訳の訳質改善, 言語処理学会論文集, NL2007, C1-3 (2007)
- [Saraki & Nitta 2008] 佐良木 昌 & 新田義彦, 正規表現とテキスト・マイニング (増補2刷), 明石書店 (2008-4)
- [Satake 1986] 佐竹昭広, 古語雑談, 岩波新書 350, 岩波書店 (1986)

- [Shouji 1997-3] 庄司育子, 日本語の補文構造に関する一考察: 「Vに行く」構文について, 日本語・日本文化, 23 pp.39-53, OUKA (Osaka University Knowledge Archive) <http://hdl.handle.net/11094/9762> 大阪大学 (1997)
- [Takabane 1952] 高羽四郎, 芭蕉俳句の構文と表意——客語の主体化について, 国文学研究 1 (1952-3)
- [Takai 2008-1] 高井収, 異文化コミュニケーション教育の試み——高コンテクスト文化としての俳句, Language Studies, 小樽商科大学言語センター広報, 学術成果コレクション Barrel <http://hdl.handle.net/10252/203> 小樽商科大学 (2008) No.16 pp.57-62
- [Tokunaga 2010-7] 徳永哲矢, 文の分析と主語——「主語」を問う視点, 国文学—解釈と鑑賞, 第73巻7号 (2010-7) pp.40-49